役員エッセイ

大通公園を望む窓辺から

為政者たるもの

副会長　藤原（ふじわら）　秀俊（ひでとし）

凡そ為政者たるものは、まず民を富まし、それによって国を富ますことを考える者である。会社であれば、社員の幸福が一番で、社員が幸福になれば、会社は繁栄し社長も幸福になれる。この国はそのような観点からみると、どうもおかしい。国民は重税に苦しみ、貧乏になり、幸福感が少ない。従って消費は進まず、国も貧乏になる。身体の不自由な方々が、数時間税務署に並び、やっとの思いで国民の義務たる納税を行う。納税者はこのお金で国を良くしてくれることを望む。一方、国は納税者に対して「納税していただいてありがとう」とは思っていない。重税で集めた税金は、我がものとして使用を誤り、国民が苦しめば、補助金という上から目線の施しをする。「お役人様ありがとう」とは誰も思わない。

老子の教えに「天下多忌諱而民彌貧。民多利器、國家滋昏」という言葉がある。『天下に忌諱（きき。きいともいう）多くして、民いよいよ貧し。民に利器多くして、國家ますます昏（くら）し』があり、これは「世の中に禁令が多くなると、人民はいよいよ貧しくなる。人民の間に文明の利器が多く使われすぎると、国家はいよいよ混乱する」という意味である。

我が国においても規制が多くなり、監視の目があちこちに張り巡らされ、息苦しい。DXと称し、デジタル化が進み、高齢者にとって住み心地が悪くなり、さらに悪用する者が多発し、誤った情報を流し続けている。このような社会は果たして幸福な社会なのであろうか。

議員は他人や他の政党のあら探しに血眼になり、本来の仕事を忘れ、目立つ発言や行動をし、国民への点数稼ぎをしている。

本来の為政者の出現が切望される。「にんべん」が付く偽政者とならぬことを望む。

聴（脳？）力に思う

常任理事　目黒（めぐろ）　順一（じゅんいち）

外来に長期間通院してくださる患者さんは、自分の加齢とともに一緒に高齢化するのは自明のことであるが、最近とみに問題と思うのが加齢性難聴である。90歳を越えた患者さんは正常な認知能力にも関わらず、補聴器をしたがらない方がいる。私の母も102歳だが重度の難聴でも集音器や補聴器（高額！）をしたがらない。仕方がないので筆談をするが、細かなニュアンスは伝わらない。お互いに（自分だけ？）ストレスを感じる状況になる。そこでなぜ補聴器をしない人がいるのか調べてみた（耳鼻咽喉科の先生は耳を塞いでね）。価格の問題、調整にかかる手間暇、他人の目を気にする、音が刺々しい、等々理由がいろいろあるようだ。しかし、脳への刺激が減少する結果、認知症になり易いとの研究もある。高度難聴の人の認知症発症リスクは4.94倍とのことである（Frank et al, JAMA 2011）。補聴器の音を刺々しく感じるのは、脳が以前の聴力低下に慣れ、それを正常と認識していたためであるという。そのため、特に大きな音量の音や、これまでに聞こえなかった小さな周囲の音が非常に違和感を持って刺々しく感じるという。成る程、脳の問題だったのだ。心当たりがある。大学２年目の1969年秋頃、部活の費用稼ぎに当時盛んであったダンパの券を買わされた。早速、好きだった女性に声をかけたが断られてしまったので、下宿の女性に（渋々）同伴してもらった。会場は札幌医大の体育館（武徳殿、寺院風の建物で今はない）で、500人以上はいただろうか。大音量のバンド演奏と大変な喧騒の中で、何と！聞こえたのである。断られた女性の声が。思わず振り向くと視線の５～６ｍ先に彼女が知らない男性と踊っていた。脳の能力ってすごいなー。

補聴器を強制することは難しいと理解したが、今後どう対処するかは難題である。自分は早めに利用したいものである。